

ぶるの違なかつた。依て之は巴むなく他日に期することとした。本書は編・章・節等の次序を表はす数字を缺いてゐるが、しかし内容からいへば第一章哲學の新趨勢 第二章哲學なき日本の科學第三章生物學と社會學 第四章生體入造論第五章生物に於ける調和第六章死第七章人類に於ける智識生活の第一歩第八章生理學上より見たる人口問題第九章兩性生活と内分泌第十章精神の身體に及ぼす影響第十一章近代に於ける生物學と哲學との關係を論じ生活現象研究の眞諦に及ぶ等の十一章から成り、更に之を細別して總じて百四十九節から成つてゐる。

著者は「物」とは何ぞ「心」とは何ぞといふ千古の大問題も、自然科學の爲す能はざる所に哲學的思索の助けを喚び來れば之を解決すること出来るといつてゐる。然らば著者の哲學説の如何なるものかなれば、精神的無差別説 (Spirituellistische Identifikation) といふものである。著者は此の純正一元論の立脚地に立てば、千古の大問題も、些の疑もなく忽ち氷解すること出来るといつて、その立脚地から生氣説(Vitalismus)を排し、二元説を駁し、唯物論的一元説を躰け、スピノザ風の並行論を破してゐる。著者の此の論が極めて滔々たるもので、些の凝滞もなく、甚だ明で又甚だ簡である。しかし又それだけ私などには、著者の此の立脚地に對する疑問が次ぎから次と際限もなく湧き起るのである。しかし此等の疑問は前に述べたるが如く私がまだ本書を精讀しないから起る疑問であつて精讀しきへすればすぐにも解かつてしまふのであるかも知れぬが、しかし一讀の上では幾多の疑問を起さずにはゐられなかつた。本書を讀みつゝ感じたことある。それは本書に限つた譯でなく

多くの日本の書物についていふのであるが、兎角日本の書物には印刷上の誤謬が多いのは甚だ以て困つたことである。本書なども校正刷の際十分注意せられたであらうが、それにも拘はず猶數十ヶ處の正誤表が一枚刷にして本に挟まれてゐる。そればかりでない。猶幾多の印刷上の間違ひが、一ヶ處あつて、それは附録の正誤表に漏れてゐる。然るに西洋の書物などには、かゝる誤謬は寔に少ない。此點は甚だ遺憾なことである。

次に『索引』のことである。是も本書に限つていふのでなく、本書を紹介する序でいふのであるが、日本の書物に索引のついてゐるのは甚だ稀であるが、是はあつた方が便宜のやうに思ふ。本書の如き浩瀚で入念の作には是非あつて欲しいやうに思はれた。(藤井健治郎)

最近の自然科學

文學士 田邊 元著

この書の紹介は大體二様に別つてなまざるべきものと思ふ。一章第一章から第五章に至る自然科學説の叙述である。彼は終の二章に於ける現代自然觀の哲學的批判とその認識論的基礎についての著者の見解である。第一の點に關しては、詳しくいふとガリレオニウ・トロンに始まつた近世の機械的自然觀が幾度か裝をかへつゝ最近の新方學的・自然觀に至る自然科學的(物理學的)原理の叙述については吾々はたゞ推服するより外はない。此方面に關する智識の殆んど皆無なる吾々にとつては著者の言ふ所を唯「なる程」と傾聴するより外はない。殊に難解なる多くの參考書をひろく参照してかくまで明晰に組織的に且つ通俗的に(よき意味に於ての)に説

述した本書の如きは、吾々が此種の著書に仰慕するの久しいこと
 しかも此種の適當なる著書をもつてゐないといふ點から見ても
 大に推稱に價するものと言はねばなるまい。

然しながら第二の點については著者の論結があまりに無難作に
 すぎなかつたかと疑ふ。例へば相對性原理の哲學的批判に於ても
 時間と空間との形式的本質から物理学上の相對論を單に批判哲學
 の立脚地によつて當然發想せられたるものと云ふが如きはあまり
 に輕易なる言説ではないか。物理学的時間はカントの直觀形式と
 しての時間とは尤で異つた意義あるものではないかと思ふ。著者
 の明言する所によつても相對性原理は時といふ經驗の形式其物に
 關するのではなく、此形式に構成せらるゝ内容に關した(同書二
 一四頁)ものであらう。相對性原理によつて主張せらるゝ時間は
 光によつて測られたる時間ではなければならぬ。この點に物理学
 的時間の最も重大なる意義あることは恐らく著者も否定すまい。相
 對性原理の認識論的解釋も此點に向けられねばならぬ。然しかく
 の如き時間を此の意味に於て相對化せんとするときは、光の主觀
 性から見て時間の相對性を論ぜねばなるまい。無論かくの如き生
 理學的見解は批判哲學の立場を去ることの違ひと共に著者の本意
 とする所でないことも明である。批判哲學の立場として唯一の可
 能なる解釋は時間と空間とを經驗の形式と見る點にあらう。然し
 物理学的時間が此種の形式とは異なることも争はれない。相對性原
 理に嚴密なる數學的基礎を與へんとしたミンコフスキーに於てき
 へもこの點は極めて明瞭にとかれてゐる。物理学的時間は光によ
 つて測定せられたる時間にして純論理的のものではない、物理学

に取扱はるゝ相對性は認識の相對性とは同一視する事ができな
 い。此等の點については發議論の要することでありかゝる疑ひも
 著者の本意を誤解したものであるかもしれぬがたゞ讀過の際に得
 た感想を記してこの好著の紹介に加へたいと思ふ。岩波書店發行。
 定價洋圓二十錢。(中川得立)

世界心國家心個人心

文學士 大島 正徳著

歐洲大戦亂は、國家といふことを廣く深く、感ぜしめた點に關
 しては大いに力がある。本書もその一動機を、世界的戰爭に發し
 てゐる。「世界心國家心個人心」といふと何だか理解し難いが、或
 は「人格と國家」と稱してもよいと言はれて居る。人格觀念を根
 極として、國際關係を論じ、國家を論じ、又國民生活を論じられ
 たものである。

第一篇世界心——國際論では、戰爭といふ事實の在するにも係
 はらずして、世界心——世界的道義心の存在することを主張し、
 此の世界心と國家との關係を論じ、平和主義と軍國主義とを批評
 せられて居る。第二篇國家心——國家論に入つては、國家の意義
 國家と社會、國家と個人、立憲政體と我國體、法治國と學治國の
 諸問題を論じ、第三篇個人心——國民論に至つては、我國國民精神
 の現狀と自覺の必要、英國及其國民性、獨逸國及其國民性、英獨
 の特質と我國國民の用意、我國及國民性の長短を論じ、此等の題下
 に、國民としての覺悟、用意を説き、更らに、教育制度の改善を
 提案し、教育者の自覺を促して居られる。

以上の如く、戰爭や、我國現今思潮界の傾向等よりして起り來